

1921 年の皇太子裕仁のイタリア訪問—相互イメージ・表象

Rosa Caroli

司会：次のご発表はローザ・カーロリ先生にお願いします。資料は概要集の 2 枚目、3 ページ目です。カーロリ先生のご専門は大きく言えば日本の近代社会史になると思いますが、沖縄学についてもご専門です。当然多くの業績をお持ちですが、主な 3 点だけご紹介しています。1 つは日本の歴史、通史です。2 番目は沖縄の歴史で、いわば表象としての沖縄ですね。3 つ目は日本語で書きになったもの。

先の昭和天皇がまだ皇太子だった時にヨーロッパを周遊された事がありました。期間は半年位だったと思いますが、船に乗っている時間が長いので実質的にはもっと短い。このヨーロッパ周遊について日本側の事情を書いた本があります。例えば皇太子の実地教育の為に実施したとか、当時の日英同盟の関係からでしょう、英国との関係についてはかなり詳しく書かれた本がありますが、イタリアで皇太子の訪問がどう報道されたかについては、おそらく皆さんも初めてお聴きになる話だと思います。ご清聴お願いします。

Caroli：ヴェネツィア大学東アジア学科の Rosa Caroli です。よろしくお願いします。

今日は 1921 年の皇太子裕仁のイタリア訪問についてお話しします。

1921 年（大正 10 年）3 月 3 日の朝早く、軍艦香取は旗艦鹿島に護送されて、ヨーロッパに向けて横浜港を出発しました。その船に特別な船客、皇太子裕仁殿下をお乗せしていたことは、天皇制下の日本の歴史上まったく新しい事件でした。実際、それ以前には、在位中の天皇にせよ、皇太子にせよ、この神聖なる地の国境を越えたことはか

つてなかったのです。日本では、最初の神話的な天皇の祖先から 123 代目に当たる、大正天皇まで、太陽の女神天照大神に起源を持つ「神祖が建国されて以来〔中略〕皇統一系の貴い位の盛んである事は、天地とともに有り終わりが無い」とされていました。この言は、最古の年代記に述べられた神道の神話とも完璧に一致する、伊藤博文の『憲法義解』にある言葉です。裕仁殿下ご自身は、間接的であるにしても、ドイツのランケ派の影響のもとに歴史を勉強して教養を積み、むしろ神話を歴史と同一視することにためらいを見せていたように思われるにせよ、これが天皇家についての解釈でした。従って、日本の皇位継承権を持つ皇太子がヨーロッパ五カ国、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、そしてイタリアを訪問したのは、異例の「行啓」という事になります。

しかし、その旅程は、日本国内の複雑な政治状況のため、早めのご帰国が予想され得るという事を考慮したせいとか、細部までは確定していませんでした。その上、皇太子の長い不在を予定することは、皇后と皇室の他のメンバーには受け入れ難いものでした。なぜなら、皇室に近い環境における権力闘争が静まりそうもないという気配を見せ、むしろ悪化しつつあった時に当たっていたからです。1920 年（大正 9 年）の夏以来、元老たちは、皇后に意見を変えるよう再三迫ったのですが、皇后の賛同を得るのに成功したのは、ようやく翌年の初めになってからの事でした。

このようにして、2 月 8 日の午後、宮内省長官によって、皇太子が約 6 ヶ月続くヨーロッパ旅行のため、3 月 3 日に横浜を船で出発することが公表されました。皇太子の旅のルートについては、

ただ、インド洋を渡り、4月末ごろイギリスに到着し、そこで到着後、その後の詳しい旅程が決定されるというに留められました。従姉弟の閑院宮載仁親王に伴われた裕仁殿下のおびたしい随員の中には宮内省御用係の珍田捨巳伯爵もいたはずです。

簡潔な公式表によって、ジョージ5世のイギリスとの関係に優先権が認められたことは明らかでした。その上、当時はアメリカ訪問の可能性も議論されたのですが、結局は中止されたという事実もあります。事実、ヨーロッパは、ベルサイユで示されたように日本の外交にとって重要な外交相手であったが、日本に外交上の平等を認める同盟を推進する西欧の第一の強国はイギリスであって、それが特権的地位を占めていたのです。従って、公には否定されていた訪問の目的は、条約の更新に最も好都合な政治的条件を作り上げることでした。

そして、3月3日に裕仁殿下は横浜港に着いて、ヨーロッパに向けて船に乗りました。そこではお祭り騒ぎの市民の群れに歓迎されました。また、「聖なる国」の未来の天皇が「蛮人の地」でヨーロッパ民衆主義の有害な要素に接触し得るといふ危険を心配する、熱烈な超国家主義者たちのグループによっても歓迎されたのです。これほど明らかではないのですが、同じように強かったのは、見かけもどこか弱々しくまだ経験も浅い若き皇太子が、ヨーロッパの首都で待っている多くの骨の折れる公式の任務遂行中に、緊張や困惑を覚えるのではないかと恐れる人々の心配でした。

実際、裕仁殿下が、近き未来に日本の摂政として、つまり天皇として、国の内外を問わず、その素質を示さなければならない最初の真の機会でもあったのです。この企画の公の意図は、ようやく学校教育を終えたばかりの未来の天皇の教育を完成させ、海外の多くの国々における支配的な条件について個人的に認識させる機会を与えるというものでした。それは、日本の将来とその国際関係に大きな影響を与えたでしょうし、天皇家と他の国の君主や人民との友情の絆を強めるために有益だったでしょう。ヨーロッパ人にとっても、賓客である皇太子との個人的な接触を通じて、日本に

ついでに最高の知識を得る機会だったでしょう。

3月3日の「東京朝日新聞」は、ご出発のニュースを伝えながら、ヨーロッパの主な旅程として、イギリス以外にフランス、ベルギー、イタリア、そして「他の諸国」と列挙しています。従って、公式の旅程はまだ決定されず、日本の船がイギリス沿岸に着く前にも、旅行中に何度も検討し直されました。

皇太子訪欧は：

イギリス (5月6日)
フランス (5月30日)
ベルギー (6月10日)
オランダ (5月15日)
フランス (6月21日)
イタリア (7月11日)

イタリア訪問については、裕仁殿下が7月11日にナポリを公式訪問、そこから翌日 御用列車でローマに向けて発ち、イタリア王の賓客としてクイリナーレ宮に滞在することが、6月21日になってようやく確定されました。イタリア王室長官によって作成された裕仁殿下の滞在プログラムが決定されたのは7月1日でした。首都ローマ訪問は約7日間続き、そのうち最初の3日は公式のもので、その後日本に向けて乗船するためナポリに戻ることでなりました。

イタリア王国の権威ある人々との合意が決定してから、ローマ法王謁見のための日程を決めることも可能になりました。それは、1861年から1929年にかけてのイタリア王国とヴァティカン（或いはローマ教皇庁）の間におきた政治的な問題である「ローマ問題」のため、イタリア公式訪問の最後に初めて行うことができたのです。

こうして6月27日に、皇太子がフランスにいる間に、パリの大司教ルドヴィーコ・エルネスト・デュボワ（Ludovico Ernesto Dubois）がヴァティカンに書簡を書きました。その中で、珍田伯爵とイタリア駐在武官である山本信次郎少将が、皇太子の名において、7月15日か16日頃に謁見を予定するよう要請し、勝手に日付を指定するこ

とを詫び、ともあれイタリア滞在が短いのでそうせざるを得なかったと述べています。さらに、山本少将は、裕仁殿下到着の手筈を整え、国家の秘書官に謁見を申し込むために、できるだけ早くローマ入りしたと述べています。実は、バチカン訪問をねじ込んだのは、カトリックを信仰していた山本信次郎だと言われています。山本がいつヴァチカンに赴いたかは知られていませんが、日本側から示唆した日付は、実際に裕仁殿下がヴァチカンを訪れた日だったのです。

皇太子のイタリア到着に先だって、イタリア王国の各県庁は、「日本臣民」によるテロリストの攻撃を恐れて、ナポリとローマに向かう疑わしい人物を監視するという目的で警戒態勢にありました。「危険きわまりない」と定義され、偽の中国人パスポートを持った何人かの韓国人アジテーターが皇太子に対して犯罪を犯す意図を持っているように思われたので、特に、日本人、中国人、韓国人に注意が払われました。イタリア当局によって準備された査定以外に、日本大使館は日本の警察官を一人派遣し、彼はナポリの警察署長のもとに出頭し、所長はこの警察官に「適宜な配慮」を与えるようにという指令を受け取りました。日本の外交団側によって要求された調査と並行して、軍隊の隊員と公安警察の奉仕の手筈が整えられました。

『皇太子殿下御外遊記』を記録した二荒芳徳と澤田節蔵によると、ようやく、7月11日月曜日の朝、香取と鹿島がナポリ港に入港しました。この二隻を護衛するために、イタリアの二隻の駆逐艦が出ました。造船所に停泊し、イタリア海軍に歓迎され、落合謙太郎大使が「セミゴッドの乗客」を乗せた船に乗船しました。王の副官であって、イタリアにおける公式訪問の間中、皇太子に随伴したガイド・ビスカレッティ・ディ・ルッフィア（Guido Biscaretti di Ruffia）提督がそれに続きました。提督は、王国の民間および軍事当局の代表者たちによって構成されたイタリア代表団を率い、日本の皇太子に当時のイタリア王ヴァットリオ・エマヌエーレ三世（Vittorio Emanuele III）の挨拶を伝えました。

若きスポレート公で、王の甥であるアイモー

ネ・ディ・サヴォイアの訪問は、午後、皇太子がカプリへ行った後、カポディモンテ宮殿でエレナ・ダオスタ公爵夫人の許に赴いたのです。船上で一夜を過ごしたのち、皇太子は次の日閑院宮や他の臣下の人々と共に香取を去り、造船所に赴き、御用列車に席を占めました。日本軍の砲兵将官の制服につけた多くの勲章の中で、1916年皇太子即位の機会にヴァットリオ・エマヌエーレ三世から叙勲されたサンツィッシマ・アヌンツィアータ章が際立っていました。ナポリ中央駅に、市民や軍人の密集した人々の他に、落合大使やビスカレッティ・ディ・ルッフィア提督の歓迎を受けました。駅に少しとどまってから、御用列車は名誉の先導列車の後から首都ローマに向かいしました。

日本の未来の天皇をローマで迎えた歓迎のさまは非常におごそかなもので、正にロンドンやパリで受けた立派な歓迎ぶりと同じような印象を皇太子に与えたでしょうが、それについての皇太子の感想は知られていません。

テルミニ駅の周りには群衆がますます集まりつつあり、そこに上院議長トンマゾ・ティットーニや多くの国会議員とともに、新首相イヴァノエ・ボノーミ、外務大臣ピエトロ・トマージ・デッラ・トッレッタおよび他の行政官たち、さらにローマ知事リッカルド・ゾッコレッティ、そしてアルマンド・ディアス將軍ほか、政治家、外交官、軍人たちが到着しました。国王ヴァットリオ・エマヌエーレ三世の従兄弟であるアオスタ公爵エマヌエーレ・フィリベルトや王室高官たちと共に到着しました。その中には、王の副官アルトゥーロ・チッタディーニ將軍、王宮長官ジョヴァンニ・パッティスタ・ボレア・ドルモ公爵、王室顧問官アレッサンドロ・マッティオーリ・バスクアリーニ伯爵が見られました。

裕仁殿下は日本国歌が演奏される中を駅に入った御用列車から降り、ヴァットリオ・エマヌエーレ三世と敬礼を交わし、公式の紹介のため、駅の貴賓室に赴かれました。その直後、二人は先頭の御用馬車に乗り、長い行列に伴われて、テルミニ広場を後にし、エゼドラ広場（現在の Repubblica

広場)に向かいました。そこでは、古代ローマ以来の習わしで、ローマ市に入った外国人王族の人に限られる慣習に従って、市長ジャンネット・ヴァッリと市の評議員や参事官たちが皇太子に市民からの歓迎を伝えるために待っていました。行列は、そこに少し留まってから、ナツィオナーレ通りに入り、混んだ行程を整備し、「ほぼ20色の様々な色」の制服を着た軍隊の配列する中を通過して、皇太子がローマ滞在中王によってもてなされるクイリナーレ宮殿に到着しました。公式の短い談話を終えてから、王と皇太子は、王宮前の広場を埋めたおびただしい数の人々に挨拶するためバルコニーに姿を現しました。

最初の公式任務の中には、パンテオンにあるヴァットリオ・エマヌエーレ二世とウンベルト一世の墓訪問があり、皇太子は二人の墓の上に二つの花輪を捧げました。そして、もう一つの花輪は、無名戦士の墓、つまり「祖国の祭壇」に捧げました。

その午後は、ピンチョの丘、ボルゲーゼ公園、動物園を散策されたのです。そして夕方は、イタリア王がクイリナーレ宮殿で裕仁殿下とその臣下の名誉のために正餐で持て成し、イタリア国家と貴族の最も権威ある人々とローマにおける日本外交団の代表者たちが参加しました。

皇太子はヨーロッパ旅行中、オランダ以外、日本も加わった第一次世界大戦の連合国の国々を訪問しましたが、イタリアはヨーロッパ旅行の最後の旅程でした。イタリア訪問の前に、皇太子がイギリスの艦隊や造船所を賞賛し、フランスの大砲や飛行機を評価し、或いはベルギーで戦われた血なまぐさい戦いの追悼に赴く機会があったとすると、イタリアでの滞在中に、殿下の注目に値したのは古代の有名なモニュメントでした。イタリアで行われた戦いの場についての映像は、前線で戦闘中に撮影され映画で、7月16日の夕べ、クイリナーレ宮殿の非公式の食事の後で映写されました。やや軍事的な味わいのある唯一の機会は、7月13日の朝シエーナ広場で行われたもので、その時皇太子は、王に伴われ、軍事トーナメントに列席されました。

従って、イタリアにおける公式滞在は、永遠の

都ローマの考古学・美術上のルートに沿って進められました。7月13日に皇太子は、パラッツォ・デッレ・エスポジツィオーニで開催中のローマ・ビエンナーレ展、ボルゲーゼ美術館、ヴァッレ・ジュリアにある国立近代美術館に赴かれました。その日の夜は、王とダオスタ公爵の名誉のために準備された日本大使館での正餐で終わりました。翌日、皇太子はコロッセオ、パラティーノ、フォーロ・ロマーノ、サン・カッリストのカタコンベ、カラカッラ帝の浴場を訪問されました。そして、午後は、カンビドッリョで皇太子に敬意を表して準備された祝賀会で、コンセルヴァトーリ美術館の素晴らしい部屋と美術品、世界で最も古い公の古代コレクションがあるカピトリニ美術館と絵画館を訪れることができました。その夜、落合大使も参加した王宮での夕食が終わってから、国王は皇太子にいとまを告げました。

法王謁見は翌日に決定されていましたが、クイリナーレ宮殿に王の賓客としてあり、また、自分に当てられた使命を果たし続けながら、その後の皇太子のローマ滞在は非公式のものとして進められたのです。皇太子は、法王ベネディクトゥス15世のもとに赴く前に、サンタ・マリア・マッジョーレ聖堂、ラテランのサン・ジョヴァンニ聖堂、城壁外のサン・パオロ聖堂を訪れました。これらは、ヴァチカンのサン・ピエトロ大聖堂と共に、ローマの四つの総大司教の聖堂をなしています。

その日の午後、皇太子は、クイリナーレ宮殿に王の賓客として滞在しているにもかかわらず、日本大使館から、ヴァチカンに向かいました。これはさっき申しましたように、イタリア王国とヴァチカンの間におきた政治的な「ローマ問題」があって、皇太子が直接クイリナーレ宮殿からヴァチカンへ行くのは適切なことではなかったからです。皇太子の欧州訪問に随行して『皇太子殿下御外遊記』を記録した二荒芳徳と澤田節蔵によると、裕仁殿下は、イタリア王国とヴァチカンの間の友好的ではない関係を考えて、イタリア王国のメダルをつけたりイタリア王室の車で行ったりするのを控えたのです。

そして、皇太子は、多くの警官や護衛兵によって守られたコースを通して、ヴァティカンのアルコ・デッレ・カンパーネを通り、サン・ダマソの中庭に至り、そこで法王庁当局の代表者たちと近衛兵の分遣隊が敬礼を行いました。そこから、スイス衛兵に護衛された三番目のロτζィアにある法王の住まいに上がり、そこで法王から「君主の名誉ある、荘厳な謁見」を賜り、父天皇からの挨拶を伝えました。「鄭重な談話」の最後に、法王から、一つはサン・ピエトロ大聖堂を、もう一つはローマの田園風景を表す二つのモザイク作品を贈り物として受け取りました。

その後、皇太子は、ヴァティカン國務所の許にガスパツリ枢機卿を訪れ、彼自身が特に要請していたように、ヴァティカン駐在の外交団の様々なメンバーに紹介されました。それから、一団の神学を学ぶ日本人学生と会い、彼らは、皇太子のサン・ピエトロ大聖堂とサクラ・グロッタの見学に随伴したものとおもわれます。荘重な会見の機会に、勲章の交換が行われました。

法王庁の様々な高官たちには、日本の等級章が授けられ、ヴァティカンからも同様に、ヴァティカン皇太子随員のメンバーに15の勲章が授けられました。その後、大使館に戻った裕仁殿下はガスパツリ枢機卿の訪問を受け、枢機卿は皇太子に法王からの感謝の言葉を伝えました。

翌日、皇太子は、ヴァティカンの美術館や画廊の最も価値ある作品のいくつかを賞賛するため、改めてヴァティカンに赴かれました。その中には、システィーナ礼拝堂、ボルジア家の住居、絵画の間、ラファエッロの部屋があり、各部門の責任ある管理者たちに案内され、とりわけ最初の東京駐在ローマ法王使節であるフマゾーニ＝ピオンディ閣下に伴われました。

ローマ市の素晴らしい眺めが楽しめるサン・ピエトロ大聖堂の円屋根に上がられた皇太子は、螺旋状の石段の壁に他の君主や公使たちによる訪問を記念する多くの銘文と並んで、自分の名と閑院宮の名が彫り込まれているのをご覧になりました。

ローマ滞在最後の日は、皇太子は、ローマを訪れていたチェコスロヴァキアの新生共和国大統領

トマーシュ・マサリク (Tomas Garrigue Masaryk) と会う機会がありました。大統領は、日本の未来の天皇に拝謁できるよう日本大使館に申請書を提出していたのです。

7月17日の朝、裕仁殿下は、テルミニ駅からナポリに向けて発ち、ナポリ駅で、スボレート公爵、市長、そして他の軍事および民間の権威ある人々に迎えられました。午後は、市立水族館を見学され、ナポリ湾の優れた景色が見えるポシッリポを車で回られました。翌日、ポンペイの遺跡を訪れてから、皇太子はイタリア当局の人々と別れの挨拶を交わし、祖国に向かってナポリ港から出発されました。ご出発前に、ヴァティカンと電報のやりとりがありましたが、皇太子からはベネディクトゥス15世から受けた鄭重な謁見に対する公式の感謝の言葉であり、それに続いて、ガスパツリ枢機卿からの返信は、法王の名においてご訪問に満足の意を表され、今回の訪問客、皇族、そして日本全国民に対して祝賀の意を表すものでした。

皇太子は9月3日に横浜に戻って、横浜からお召し列車で東京に向かいました。東京駅までの沿線は人々であふれ、万歳の声が絶えることが無かったのです。

結局、イタリアはヨーロッパ旅行の最後の行程でした。その主要な目的は、将来の天皇の素質を試みることはもとより、第一次大戦で勝利する結果になった日本の国際的地位を強化すること、自らの軍事力を確認することでした。これは、皇太子とその随行者たちの旅行に軍艦を選んだことが示しているように思われます。それから、西洋諸国との友好の絆と相互理解を強化することでした。

彼らがイタリア王国やヴァティカンから受けた公式の名誉、ナポリやローマ滞在中に伴った市民の注目、そして、この出来事がイタリアの主要な日刊紙上に占めたスペースはこの訪問の重要性を示しています。いくつかの新聞は、この機会に、1585年に法王庁に送られた最初の日本使節団の時代以来の両国の関係史を回想したりもしています。これらは、皇太子の旅の秘めた宣伝目的をも満足させるものでした。事実、皇太子に捧げられた盛大な歓迎と未来の天皇としての完璧なパー

フォーマンズの反響は、かつてない企画の成功を強調する新聞によって、詳細に伝えられ、ヨーロッパから日本の読者に達しました。ヨーロッパ旅行の公式の報告書を書いた二荒芳徳と澤田節蔵は、皇太子が旅行中、カトリック教会の首長の他に、八国もの首長に会ったことを強調するのを忘れませんでした。

丁度六ヶ月かかった旅行は9月3日に終わり、香取、鹿島の両船は横浜に帰港しました。その二ヵ月後の11月4日、内閣総理大臣であった原敬が暗殺されました。そして、原敬の暗殺から数日経って、裕仁殿下は大正天皇の摂政として即位しました。結局、ヨーロッパ旅行と即位は、1919年1921年を含む、短いとはいえ複雑な時期に終わりを告げ、歴史的には、政府と元老の間の権力の均衡に決定的な転換をもたらした時期と見なされています。それは、皇室顧問に任命された西園寺公望の勢力の増大と、翌年2月に亡くなった山県有朋に結びついた派閥の失墜でした。実は日本の君主制の性質と外部世界との関係についての意見は様々でした。従って、西園寺の勢力の増大は、一時的にせよ、国際主義者の外交の勝利であると言えますが、それは1931年まで何度も外務大臣になった幣原喜重郎によって具体化され、次の10年間の初めまでは立憲君主制の支持者が勝利をおさめていました。この立憲君主制が、明治憲法の限られた解釈におけるものであったにせよ、です。

実際、日本の政治的、軍事的選択が来るべき年に劇的に運命を印し、イタリアとの再会が果たされます。しかしそれは、かつて1921年に、「両国は平和を得るために協力する」であろうと自信を持って言われた時に、裕仁殿下によって表現されたものとは全く異なる基盤の上で行われたのであります。以上です。

司会：ありがとうございました。ご質問があればパネルディスカッションの際に伺います。5分ほど休憩して次の日高先生の話に移りたいと思います。